

英学史の研究

竹中龍範

(1) 学会・学界の動向

夏目漱石の歿後 100 年となる 2016 年に続き、2017 年は生誕 150 年ということで、関係の著書・研究書の刊行が続いている。一方では漱石関連の展示会も昨年に続いて各地で催され、鎌倉文学館では 2017 年 4 月から 7 月にかけて夏目漱石生誕 150 年特別展「漱石からの手紙 漱石への手紙」が開催された。しかし、漱石研究の範囲はあまりに広く、次節「単行本」では評伝、回想記を取り上げるにとどめたい。

なお、昨年版ではシェイクスピア歿後 400 年にも触れたが、「シェイクスピアと桃山学院——旧制桃山中学校教師・河島敬蔵を中心に」が 2016 年 11 月 24 日～17 年 2 月 28 日(桃山学院大学)、12 月 19 日～同 27 日(泉大津市役所)に開催された。

さて、当年度(2016 年 4 月～2017 年 3 月)も学会・学界の動きから見ておく。

年度が明けて 5 月、日本英語教育史学会が第 32 回全国大会(東京大会)を 14 日(土)・15 日(日)の両日、東京電機大学を会場に開催した。初日は、島岡丘の記念講演「1 人称で語る大塚キャンパスから筑波キャンパスへ——昭和 7(1932)年からの歩み」を聴き、両日にわたる研究発表には、惟任泰裕「東京商科大学予科の英語入学試験問題」など 11 本があった。この全国大会に続く奇数月に開催の 258～262 回研究例会では、久保野雅史「戦後の高校英文法教育史(その 1): 検定教科書の 9 年間と、自由化後の高校現場」など 5 本の研究発表が行われ、「自著を語る」のコーナーには、森悟著『武信由太郎伝』など、5 本の会員著書が取り上げられた。

日本英学史学会は、第 53 回全国大会を 11 月 5 日(土)～6 日(日)に、漱石ともゆかりの深い松山市にて松山大学を会場に開催した。初日は、竹中龍範の特別講演「松山時代の漱石」を聴き、その後、旧松山中学資料館など同市内の英学史関係史跡の見学ツアーが行われた。2 日目は、飛田良文「英和对訳袖珍辞書の書誌について」など、研究発表 12 本を聴いた。本部月例研究会は、8 月と 11 月を除き、2016 年 4 月の第 500 回例会から翌年 3 月の第 509 回が開催された。研究発表は、石原千里「英語事始とオランダ通詞——名村五八郎研究から」など 9 本が行われ、ほかに楠家重敏「自著を語る: 『幕末の言語革命』」を聴いている。

同学会各支部の活動をみておく。東日本支部は、第 21 回支部大会を支部創立 20 周年記念大会として「横浜と英学」をテーマに、2017 年 3 月 17 日(金)に神奈川近代文学館にて開催した。小玉敏子の特別記念講演「横浜のミッションスクール」に続き、

回顧と展望

河元由美子「横浜英国駐屯軍と接触した日本人」など5本の研究発表が行われ、翌18日は英学史跡見学会に当てられた。関西支部は、第52回支部大会を6月14日(土)、桃山学院大学を会場に開催し、加藤詔土「帰国しなかったお雇い教師 O. O. キール」ほか1本の研究発表を聴いた。研究大会の方は、8月27日(土)に同志社大学にて開催、田井玲子「神戸の写真師・市田左右太と明治初期の古写真」など研究発表3本が行われた。中国・四国支部は、第1回研究例会を5月28日(土)、安田女子大学にて開催、野村勝美「助動詞『た(だ)』の英・仏語訳をめぐって——『出家とその弟子』とその英仏訳本からの考察」、ほか資料紹介1本を聴いた。第2回研究例会は、12月10日(土)、倉敷市のノートルダム清心学園を会場とし、山田昌宏「岡山県の中学校・高等学校における英語教育に関わった人たち」など、研究発表2本を聴いた。九州支部は、4月に熊本地方が大地震に襲われるなどしたが、6月4日(土)、崇城大学を会場に支部大会と漱石記念年アカデミックフェスタ「五高教授夏目漱石の英学とロンドン留学」とを併催した。英学者・教育者としての漱石の業績を顕彰し、恒松郁夫「漱石先生とロンドンを歩く」の講演のほか、6件の研究発表が行われた。

学会賞について、日本英学史学会では、豊田實賞が高木不二『幕末維新期の米国留学——横井左平太の海軍修学』(2015年9月)に、日本英学史学会奨励賞が武市一成『松本亨と「英語で考える」——ラジオ英語会話と戦後民主主義』(2015年9月)に授与された。日本英語教育史学会賞は当該年度について該当者はなかった。

当年度中の物故者として、2017年1月11日、日本英語教育史研究会、現在の日本英語教育史学会の創設に当たってその中心となり、代表幹事・初代会長を長らく務めた出来成訓が永逝した。享年80。同学会の運営に対して物心両面にわたって多大なる貢献をなし、その残した足跡は大きい。

(2) 単行本

前年度分に漏れたもののうち、まず、高木不二『幕末維新期の米国留学——横井左平太の海軍修学』(慶應義塾大学出版会、2015年9月)と、武市一成『松本亨と「英語で考える」——ラジオ英語会話と戦後民主主義』(彩流社、2015年9月)とを挙げる。それぞれ2016年度の日本英学史学会豊田實賞、同奨励賞を受けているが、前者は、横井小楠の甥で米国に留学して軍事技術や法制を学んだ横井左平太について、海外での資料調査をも十分に行ってまとめている。後者は、長らくNHKの「英語会話」講師を務めた松本亨を「日米関係史という歴史学的見地から」(「序文」)考察したもので、「言語、国境、アイデンティティ」というテーマを徹底させて論じた人物論である。ほかに、西川盛雄『ラフカディオ・ハーンの魅力』(新宿書房、2016年2月)は、著者が「新しい『小泉八雲』をつくる示唆に富んだまなざし」(小泉凡「本書によせて」)をもって書いた既発表のエッセー・評論をまとめている。

英学史の研究

当年度の英学史・英語教育史分野の著作として、まず、夏目漱石関係のものを評伝、回想記に限ると、評伝では、十川信介『夏目漱石』(岩波新書、2016年11月)が「いつも与えられた現在の職務に忠実であった。だが(中略)彼の心の中には、つねに現状に満足できない強い欲求が潜んでいたようだ」「(はじめに)」との見方を視座に据えて漱石の生涯と生活ぶりを辿る。一方、佐々木英昭『夏目漱石』(ミネルヴァ書房、2016年12月)は、「[漱石]の思考とその推移を生涯にわたって隅々まで照らし出す——その意味で内的な——伝記」「(序章)」との意図の下にまとめられている。回想記として、生前の漱石と直接に対したことのある人物の回想49編を収めた十川信介編『漱石追想』(岩波文庫、2016年3月)、丸善の『學鐙』誌上に漱石自身が書いたものと漱石について書かれた記事とを再録編集した小山慶太編著『漱石と「學鐙」』(丸善出版、2017年1月)とを挙げておく。なお、漱石全集の最終決定版「定本 漱石全集」(岩波書店)が2016年12月より刊行開始となり、つい先年に発見された「アーサー・ヘルプスの論文」(長島裕子「漱石が翻刻した英語の教科書——丸善発行のアーサー・ヘルプスの文集」『図書』第813号(2016年11月)参照)も収録予定となっている。

本年鑑2016年版において、2015年が斎藤秀三郎『熟語本位 英和中辞典』刊行100周年に当たることに触れたが、その新版(CD-ROM付)が斎藤秀三郎著・豊田実増補・八木克正校注により発行された(岩波書店、2016年10月)。本文は、現代仮名遣い、常用漢字によって新たに版を組み、振り仮名を施し、さらに、現代では理解しにくい英語や日本語に必要な注釈を加えて新版とされた。この校注に際し校注者がつけた注を敷衍したり、注には書けなかったことで興味ある話をまとめたりした八木克正『斎藤さんの英和中辞典——響きあう日本語と英語を求めて』(岩波書店、2016年10月)を併せ読めば、この新版を再評価しながら味読する楽しみにつながる。

山田昌宏『岡山県中学校・高等学校 英語教育史年表』(私家版、2016年6月)は、岡山県の中学校と高等学校の英語教育に関する研究会、研修会、研究発表、研究論文、生徒の活動成果及びそれらに関わった人物、関係する国の施策等を時系列で年表形式にまとめたものである。各地の英語教育研究会などによるものを併せ見てもこれほど詳細にわたる年表は他に類を見ず、個人の手になるものとして一大労作である。若林俊輔著/小菅和也ほか編『英語は「教わったように教えるな」』(研究社、2016年6月)は、2002年に逝去した著者が書いた雑誌記事を中心に単行本未収録の論考をその教え子5名が集成、再編したものであるが、その第5章を「英語教育の歩み」に充てている。森悟『武信由太郎伝』(今井出版、2016年7月)は、愛知英語学校、札幌農学校に学び、『英語青年』を創刊し、『武信和英大辞典』を編んで、「人生の大半を英文の添削に費やした」「(はじめに)」武信由太郎の伝記で、その英学者としての生涯を描く。吉村侑久代『イギリス生まれの日本文学研究者 R. H. プライス研究——足跡と業績』(2016年10月、林檎屋文庫)は、第四高等学校、学習院大学等に英語・英文学を教え、

回顧と展望

日本文学、特に俳句や川柳を海外に紹介した R. H. プライスの小伝、著作を紹介し、その功績を分析している。中村捷編著『名著に学ぶこれからの英語教育と教授法』（開拓社、2016年11月）は、外国語（英語）教育の名著、あるいは聖書とも呼ばれる外山正一『英語教授法』（1897）、岡倉由三郎『英語教育』（1911）、O. Jespersen, *How to Teach a Foreign Language* (1904)、H. Sweet, *The Practical Study of Languages* (1899)の内容を要約し、解説を付したものである。著者は「これらの本を取り上げるのは、英語教育史的興味からではなく、これらの著書のいずれもが現代的意味を持っているからである。現代に通用する英語教育の基本原理について述べているからである」（「はじめに」）と記すが、本書によってこれらの名著に親しみ、さらにはその原著に読み進むことで、英語教育史の研究に入っていくこともできよう。山口栄鉄『チェンパレンの琉球・沖縄発見』（芙蓉書房出版、2016年11月）は、著者が「国際琉球学」「欧文琉球学」のパイオニアと呼ぶチェンパレン(B. H. Chamberlain)と琉球とのつながり、その琉球・沖縄見聞録、ならびに「琉球語概観」を紹介したものである。楠家重敏『幕末の言語革命』（晃洋書房、2017年1月）は、幕末期、英学や仏学が発展し、日本人の外来文化受容能力が高まったことについての研究は多いが、同時期の外国人による日本語学習という問題は等閑視、または無視されていた研究状況に対して、英国外交官の日本語学習を分析し、さらに、この時期の我が国における西欧語の栄枯盛衰を描く。染村絢子『ラフカディオ・ハーンと六人の日本人』（能登印刷出版部、2017年1月）は、ハーンと6人の日本人、すなわち、茨木清次郎、角田柳作、田部隆次、甲斐美和、雨森信成、長谷川武次郎との関わりについて説くが、紙数にして凡そ半分を茨木清次郎の、特にその英国留学のことに充てている。斎藤兆史『英語襲来と日本人——今なお続く苦悶と狂乱』（中央公論新社、2017年1月）は旧刊の『英語襲来と日本人——えげれす語事始』（2001年）の副題を改めて文庫本化したものである。

蘭学史、洋学史方面では、片桐一男『勝海舟の蘭学と海軍伝習』（勉誠出版、2016年6月）が、勝の立身に大きな要因となった蘭学習得について、その蘭学とはどんなものであったかということの検討をスコープに据え、新出の糸魚川市清水家資料をも援用しつつ、勝が蘭学、海軍伝習を学び、世にはばたく立脚点とした足跡を追っている。市川慎一『わたしの日仏交流史研究ことばはじめ——レオンス・ヴェルニーから大佛次郎まで』（彩流社、2016年5月）は、「日本的なものとフランス的なものが交流しあう独特な均衡を持った領域」（阿尾安泰「序文」）である日仏交流史からいくつかの実例を取り上げて分析したものである。石井元章『明治期のイタリア留学——文化受容と語学習得』（吉川弘文館、2017年1月）は、明治新政府の掲げた殖産興業の二つの柱、すなわち養蚕業と美術工芸品のどちらとも深く関わっていたイタリアに留学し、日伊交流の原点ともなった井尻儀三郎、緒方惟直、川村清雄、長沼守敬らの事蹟を明らかにしている。斎藤多喜夫『幕末・明治の横浜 西洋文化事始め』（明石書店、2017

年3月)は、幕末明初における西洋文化の移転を外国人による居留地への移植と日本人による摂取の視点から舞台を横浜に限定して論じ、「横浜の洋学」に1章を割く。

翻訳論の方面では、文部省『百科全書』を研究対象に据えて、翻訳学の視点から探究した長沼美香子『訳された近代——文部省『百科全書』の翻訳学』(法政大学出版局, 2017年2月)を挙げておく。「特定の翻訳テキストを同時代コンテキストに定位し、起点テキスト(原著)と併せて読むことで、歴史の曲がり角にあった日本の近代を翻訳の問題系から再考する試み」であり、「日本の近代を『訳された近代』として捉え直すことである」(「序章」)とする。終章では「翻訳」の概念規定に踏み込んでいる。

関連分野の業績として鄭光著/廣剛・木村可奈子訳『李朝時代の外国語教育』(臨川書店, 2016年7月)を挙げておく。現代の基準から見ても全く遜色の無い形で行われた朝鮮時代の外国語教育について、方法、制度などの点から総合的に分析し、司訳院にて行われた中国語・モンゴル語・日本語・女真語・満州語教育の歴史を論じる。

(3) 紀要論文等

本節では紙幅の都合により紀要等に掲載の論文について著者名、題目のみを掲げる。

2016年5月発行の『日本英語教育史研究』第31号は、竹中龍範「東京高等師範学校文科兼修体操専修科のこと」、西原雅博「明治期中学校英語教授国家基準の伝達:『文検』による伝達ルートに焦点をあてて」、赤石恵一「札幌農学校の elocution: 米国の系譜から」の3本を論文として採択し、他に西忠温の講演「熊本洋学校お雇い教師 Captain Janes の英語教育と熊本バンド: その源流を辿りながら」を収める。

日本英学史学会の『英学史研究』第49号(2016年10月)の論文採択は、岩上はる子「F. V. ディキンズの再来日の日々を追う——マリア・ルス号裁判を中心に」、三好彰「『英米対話捷徑』の編纂法の考察」、菅紀子「新渡戸稲造と松山事件」、楠家重敏「イギリス公使館の通訳見習制度」、赤石恵一「札幌農学校教頭 W. S. Clark の英語教育: 自律支援の集団の創造」の5本に及ぶ。

同学会各支部の紀要では、東日本支部の『東日本英学史研究』第16号(2017年3月)は、同支部創設20周年に際し、記念特集を組んで、加藤詔士「世界に拓かれた近代日本教育——英学史研究の一視点」、竹中龍範「『外国語研究要論』をめぐって」、三好彰「米沢藩最初の留学生 畠山潮平——上杉新田藩の養継嗣となった上杉亨・勝賢」の招待論文3本を収める。第2特集は支部大会に係って「築地居留地と英学」を特集し、北垣宗治「築地と帝国海軍」の特別講演録に続き、長谷川勝政「英学者 本田増次郎と築地——英語習得とキリスト教帰依をめぐって」、三好彰「築地居留地で始まった電信サービス——その前史を中心として」を掲載、一般論文には石原千里「1860年パウアタン号上におけるヘンリー・ウッドの英語教育」、高畑美代子「横浜英仏駐屯軍をめぐって」、稲垣滋子「グラバー商会と佐賀藩の高島炭鉱共同経営について——ジョ

回顧と展望

セフ・ヒコ自叙伝の記述から」の3本を採択する。巻末の相原由美子「東日本支部 20年の歩み」、ならびに河元由美子調べ「紀要(第1号～第15号)の総目次」は同支部の活動記録となっている。関西支部は当年度『関西英学史研究』を第9号(2016年6月)、第10号(2017年2月)と2号発行したが、第9号には論文の採択はない。第10号は、土居峻「借用語の意味変化——futon『布団』とhibachi『火鉢』」、岩上はる子「マリア・ルス号裁判はいかに伝えられたか—The Japan Weekly Mailの報道を中心に」、石井容子「ジェインズとハーンとチェンバレン」の3本を採る。中国・四国支部の『英学史論叢』第19号(2016年5月)には、研究論考として河村和也「新制高等学校発定期の入学選抜における英語の位置付けについて：高知県の場合」1本を採択している。同号巻末の「日本英学史学会中国・四国支部年表稿(2006～2016)」(事務局編)は同紀要第10号に掲載された「日本英学史学会広島支部及び中国・四国支部年表稿」に続くもので、同支部の活動の跡が記録されている。

『東北学院英学史年報』第38号(2017年3月)は、「山川ダンテと大賀壽吉」を特集し、松田公江「浮かび上がる山川丙三郎像から」、赤井規晃・松田公江・下館和巳「翻刻 山川丙三郎より大賀壽吉の書簡(2)」の2本を収め、他に柴田良孝「小林淳男先生の学統と東北学院」を掲載する。『へるん』No. 53(2016年6月)は、「八雲の記憶、百年の継承。八雲会100年(1915→2015)」ほかの特集2本を巻頭に置き、次いで「ヘルンの文学」、「ヘルンゆかりの人々・ゆかりの地」、「未刊行資料・埋もれた資料」のセクションに24本の記事を掲載している。

この他、平田諭治「岡倉由三郎の『国際語としての英語』をめぐる思想と行動——1930年代初めのベーシック・イングリッシュの受容を中心にして」『教育学研究』第83巻第3号(2016年9月)、三好彰「薩摩辞書の編纂法の考察」『東京大学言語学論集』37(2016年9月)、鈴木聡「旧制高等商業学校教授についての一考察——竹原常太、細江逸記、濱林生之助及び河村重治郎を例にして」・「臨時教員養成所卒業生の動向に関する一考察——東京高等師範学校と東京第一臨時教員養成所英語科卒業生を対比して」何れも『鳥羽商船高等専門学校紀要』第39号(2016)、飛田良文「『英和对訳袖珍辞書』の英文 PREFACE と編集方法について」『日本近代語研究』6(2017年3月)、久松健一「鎖国時代の西洋語受容主要文献年表1～8」『日本古書通信』(2016年5月号～12月号)等が当年度の収穫として得られた。

(4) その他

以上、「英学史の研究」の領域にとともに羽翼をなす日本英学史学会、日本英語教育史学会の活動を中心に学界の2016年度現況を概観した。周辺領域、関連分野を含めて目配りをしているつもりではあるが、欠くべからざる情報を落としているのではないかと懼れる。関係者からの情報提供をお願いするところである。(香川大学教授)